令和５年度　秋季研究会講演

寒月君と私―如何にして私は寅彦にたどり着いたか

佐藤妙子

皆さん。この夏はいかがお過ごしでしたでしょうか。新潟は、最高気温日本一を記録する日が続き、寅彦と違って、暑さに弱い私は、ひいひい言いながら過ごしていました。

そんな中書き上げたのが、本日お話しする「寒月君と私―如何にして私は寅彦にたどり着いたか」です。ご存じの方も多いと思いますが、私が寅彦を知ったのは、『吾輩は猫である』の寒月君がきっかけとなったからです。本日は、私がどうやって寒月君から寅彦にたどり着いたかをお話ししたいと思います。通常の講演と違い、専門的なこと、学術的なことはまったくありませんが、その分、気軽に聞いていただけるのではないかと思っております。

まずは、『吾輩は猫である』を最初に読んだ話から始めたいと思います。この小説は、猫の目を通して人間社会を風刺した夏目漱石のユーモア小説です。

『猫』との出会いは、小学校６年生の時。歯科医院の帰りに、母から「本を買ってあげる」と言われ、迷わず選んだのが、この本でした。理由は単純です。今でもそうですが、猫が好きで、猫と名の付く本は何でもいいから読んでみたかったのです。

『猫』は長編ですが、ルビと用語解説のおかげで、読み通すことができました。

当然ですが、この作品の文学的価値や、漱石が表現したかったことなど、一切理解していませんでした。当時の感想は以下の二つです。

① 猫の吾輩がクール

② 登場人物が変な人ばかり

その中でも、一番好きだったのが理学士の水島寒月君でした。なぜかというと、他の人物に比べて、容姿がかっこよく、謎めいた部分、食えない部分もありつつ、面白いエピソードがたくさんあったからです。ちなみに、猫の飼い主の苦沙弥先生は偏屈なおじさん、友人の迷亭君は嘘ばっかり言っている人にしか思えませんでした。

寒月君の登場は第２回。年始の挨拶に苦沙弥先生を訪ねてきます。吾輩君による寒月君の紹介は次の通りです。

「この寒月という男はやはり主人の旧門下生であったそうだが、いまでは学校を卒業して、何でも主人より立派になっているという話である。この男がどういうわけか、よく主人の所へ遊びに来る。来ると自分を恋っている女がありそうな、なさそうな、世の中が面白そうな、詰まらなそうな、凄いような艶っぽいような文句ばかり並べては帰る」

とらえどころのない人物のような書かれ方もしていますが、辛辣な吾輩君にしてはめずらしくほめているように思えます。

実際、寒月君は他の登場人物より好待遇を受けています。

まず、彼は、登場人物の中で、一番に名前を与えられています。もっとも、これは、『猫』はもともと、一回こっきりのつもりだったので、初回に登場した人物にはあえて名前をつけなかったからかも

しれませんが、それにしても、「苦沙弥」や「迷亭」などとは比べようもない立派な名前です。

「寒月」は冬の季語で、「凍てついた空にかかる冴えきった月」を意味しています。これは彼の身分である「理学士」の怜悧なイメージを表しているのではないでしょうか。

理学士寒月君は、苦沙弥先生によると、大学院で「地球の磁気」の研究をしているそうで、しかも前途有望な学者であるようなのです。それは、迷亭君による寒月君の人物評から推測することができます。

「（寒月君は）かたじけなくも学問最高の府を第一位に卒業して毫も倦怠の念もなく長州征伐時代の羽織の紐をぶら下げて、日夜団栗のスタビリチーを研究し、それでもなお満足する様子もなく、近々のうちにロード・ケルヴィンを圧倒するほどの大論文を発表しようとしつつあるではないか。（中略）迷亭一流のたとえを以って寒月君を評すれば彼は活動図書館である。知識を以って捏ね上げたる二十八珊の弾丸である」

と、当時有名だったイギリスの物理学者ケルヴィンを引き合いに出して、絶賛しています。

そんな寒月君のプロフィールをまとめてみました。

フルネームは、水島寒月。年齢は、26～27 歳。出身地は高知。これは、鰹節が国の名産であることと、今宵を意味する「こいさ」という土佐方言を使っているところからの推測です。

趣味はバイオリンを弾くこと。とある名士宅での合奏会に参加しているので、なかなかの名手のようです。また、詩人の友人に「俳劇」なるものを提案しているので、俳句に興味があるのではないでしょうか？　ちなみに、俳劇とは舞台上に展開された装置を見て、一句読み上げるという一幕物の劇だそうです。正直、あまりおもしろくなさそうです。また、趣味とはちょっと違いますが、物語の後半では、ズボンが擦り切れるほど自転車の練習をしています。いったんはまると、のめりこむタイプなのかもしれません。

癖は、羽織の紐をひねくること。吸っている煙草は「朝日」に「敷島」。これは安い口付紙巻き煙草だそうで、同じく『猫』の登場人物である多々良三平君にいわせると「たばこでも、朝日や敷島をふかしていては幅が利かんです」とのことですが、寒月君はおそらくそんなことなど、気にしていないでしょう。

学歴は、東京帝国大学理科大学の大学院に在籍。かつて「団栗のスタビリチーを論じ合わせて天体の運行に及ぶ」という論文を書いたそうです。

容姿についてはどうかといえば、「背のすらりとした、色の浅黒い一の字眉の苦み走った好男子」で鼻の下に薄黒いひげがあるそうです。正確に言うとこの描写は、苦沙弥先生宅に入った泥棒を、吾輩君が言いあらわしたものなのですが、泥棒と寒月君が瓜二つということで、そのまま使わせてもらいました。「好男子」は辞書で調べると「顔立ちの良い男。美男」とあります。余談ですが、後年、映画『吾輩は猫である』を見た時、演じている俳優さんには申し訳ないのですが、「寒月君が本に書かれているのと全然違う」とがっかりした覚えがあります。

さて、好男子の寒月君は、先ほどお話ししたように、猫の中で様々なおもしろエピソードを提供してくれています。

まず、年始のあいさつで苦沙弥先生を訪ねてきますが、この時は前歯が欠けた状態です。なんでもしいたけを食って欠けてしまったそうです。その後、苦沙弥先生に詩人の越智東風君を紹介し、別の日に苦沙弥先生を訪れた際には、吾妻橋で水底から女に呼ばれ入水しかけた体験談を語ります。

第3回目になると、首くくりの力学の演説を苦沙弥先生宅で披露します。さらに、近所の金持ち夫人が、娘婿の候補として寒月君の人柄を聞きに来ます。

その縁談話の影響なのか、博士論文の稿を起こします。タイトルは「蛙の目玉の電動作用に対する紫外線の影響」。首くくりの力学同様、一体何の役に立つのかわかりませんが、その論文のため、蛙の目玉のレンズに見立てたガラスの球を日夜すりつづけることとなります。

科学以外でも、詩人の越智東風君に「俳劇」を提案するといった、文学的な面を見せたかと思えば、「夜中の上野に虎の声を聞きに行こう」と苦沙弥先生に謎の誘いをかけたり、最終章では、結婚祝いにもらった鰹節を持参し、学生時代にバイオリンを買った顛末を語っています。

こんな面白い人物にモデルがいようとは、当時は思いもしませんでした。巻末の解説にも、猫にモデルがいたとは書いてありますが、人間については何も書かれていませんでした。全ては漱石の創作だと思っていたのです。なので、数年後、『「吾輩は猫である」の謎』（長山靖生著、文春新書）を読んだときは、驚きました。

この本によると、登場人物にはそれぞれモデルがいて、苦沙弥先生は漱石とのこと。当然、寒月君にもモデルがいて、紹介されていたのが寺田寅彦でした。寅彦について、この本でわかったことは以下の通りです。

土佐藩士族の出で東京生まれ。

熊本の五高で漱石に英語を学び、東京帝国大学理科大学に入学。大学院を経て、帝大の講師に。漱石とは頻繁に手紙をやりとりする仲で、「金公」「寅さん」というくだけた署名の葉書もあるとのこと。

また、この本には人物以外にも、机や原稿用紙といった「モノ」や、水彩画や謡といった「事柄」についても謎解きがなされています。長山氏によると、

「この本（吾輩は猫である）に、書き込まれている膨大な情報には、全てに意味があり、必然性がある」そうで、例えば、さっきお話しした寒月君の羽織の紐をひねくるクセについてですが、これにも思想的な決意が秘められているとのこと。

寒月君の羽織の紐は、彼の祖父が長州征伐の時に用いたものであると、寒月君が語っています。そんな「長州征伐の記念の羽織の紐」を胸に抱き、始終それを手にしているのは、土佐人としての矜持を以って、薩長藩閥の牛尾につくのを潔しとしないとの決意を、日々かみしめるため、なのだそうです。

そんなささいなことも解説してくれているこの本ですが、重要なことが欠けていました。寅彦が「随筆家」であったという記載がまったくないのです。巻末の参考文献にも、寅彦の著作はありません。どうして書いてくれなかったのかは謎です。なので、この本を読んだ時点では、寅彦は「漱石の知り合い」ぐらいの認識しかありませんでした。では、どうやって随筆家寅彦を知ることになったのか？　それは『寺田寅彦は忘れた頃にやって来る』（松本哉著、集英社新書）によってです。

帯には「こんな時代だからこそ寅彦の生き方に学べ！」と書かれています。今でこそ、地震＝寅彦といった感がありますが、この本の発行は2002年（平成14年）で、震災の前です。なぜこの時期にこの本が発行されたのか？　もしかしたら、前年にあった9.11が影響しているのでしょうか？
それはともかく、この本のおかげで、寅彦のことを詳しく知ることができました。

まず「天災は忘れた頃にやって来る」が、寅彦の言葉であるということに驚かされました。てっきり、ことわざとか昔からの警句で、発言者が特定できているとは思っていなかったのです。

学歴、研究についても書かれていました。東京帝国大学の教授で、専門は実験物理学。「尺八の音響学的研究」で理学博士の学位を取得。なんだか、寒月君を思わせる変わった論文です。かと思うと、「ラウエ斑点の研究」というノーベル賞級の研究も行っており、これは只者ではないぞと思いきや、金平糖の角のでき方やガラスの割れ目の研究をしていたり、寒月君以上にとらえどころがなく、不思議な人です。もっとも、これが寅彦の魅力なのですが、この時はそれに気づくことはありませんでした。

漱石との関係もさらに詳しく知ることとなります。

親しくなったきっかけは、五高時代、級友の「点をもらいに行った」とき、「俳句とは一体どんなものですか？」と質問したこと。

それに対する漱石の答え。「俳句はレトリックの煎じ詰めたものである」「扇のかなめのような集注点を指摘し描写して、それから放散する聯想の世界を暗示するものである」。私には何のことかさっぱりですが、寅彦は感銘を受け、その後、「立田山ふもとの自分の下宿からはずいぶん遠かったのを、まるで恋人にでも会いに行くような心持で通ったものである」となってしまうのです。「この人、どれだけ漱石のこと好きなんだ？」寅彦には悪いけど、この時は、ちょっと引いてしまいました。

とはいえ、これだけ慕われたら漱石は悪い気はしなかったでしょう。寒月君が好待遇だった理由がわかる気がします。

そしてもう一人恩師がいたことを知りました。田丸先生です。この人の講義を聞いたことで、造船から物理学に転向。そして、バイオリン演奏のきっかけをくれた人でもあります。田丸先生がいなければ、寒月君のいくつかのエピソード、というより、後の理学博士兼随筆家の寅彦はなかったかもしれません。

ほかにも、「猫好きだった」とか「ヘビースモーカー」だったこともわかりましたが、私にとって一番重要な情報が、「沢山の随筆を書いた」というものです。

この本でもいくつか紹介されていました。

「猫の穴掘り」「喫煙四十年」「団栗」「重兵衛さんの一家」などなど。ほんの一部しか掲載されていませんでしたが、タイトルの面白さもさることながら、素朴な中にも鋭い指摘がある内容に、心が惹かれました。

こうなっては、読まずにはいられません。ついに、寅彦の著作を手にすることになります。

最初に読んだのは、岩波文庫の『柿の種』。あの当時は、岩波文庫くらいしか出ていなかったように思います。この本は短い文章が集められていて、読みやすかったのが幸いでした。「ずいぶんいろんなテーマで書いているな。多彩な人だな」というのが読後の感想です。

次に読んだのが、同じく岩波文庫の『寺田寅彦随筆集』全５巻。科学について書かれたものは難しくて、よくわからないところもありましたが、日常を描いたものは読みやすく、特に郷土、高知のことを書いた随筆は、どこか懐かしさを感じさせてくれました。そんな中、第５巻に収録されている「自由画稿（三）　冬夜の田園詩」を読んでいたら、とある記述に目が留まりました。

○「自由画稿」（三）冬夜の田園詩

B 家の伯母さんが聞かせてくれた話

「冬のやみ夜に山中のたぬきどもが集まって舞踏会のようなことをやる。その時に足踏みならしてたぬきの歌う歌の文句が、「こいさ（今宵の方言）お月夜で、お山踏み（たぶん山見分の役人のことらしい）も来まいぞ」というので、そのあとに、なんとかかんとかで「ドンドコショ」というはやしが付くのである。」

そうです。『猫』の第 3 回で、寒月君が苦沙弥先生に宛てた葉書の内容と、ほぼ同じだったのです。

○『吾輩は猫である』第 3 回

寒月君が苦沙弥先生に宛てた葉書を、金持ち夫人が読む場面。

「鼻子は下女が新聞を読むように読み出す。「旧暦の歳の夜、山の狸が園遊会をやって盛んに舞踏します。その歌に曰く、こいさ、年の夜で、御山婦美も来まいぞ。スッポコポンノポン」

寅彦の随筆では民俗学的解釈がなされているのに対し、『猫』の方では、俗物なブルジョア階級をからかうネタとして使われています。なお、この葉書を金持ち夫人に読むように勧めたのは迷亭君です。これにより、寅彦が漱石に提供したのは、寒月君の人物像だけではないことがわかりました。さらに寅彦の作品を読み進めると、元ネタや秘話のようなものがいくつも見つかりました。

① 欠けた前歯→「自由画稿」（九）歯

寅彦は「親譲り」で歯が悪かったといっていますが、どう考えても、甘いものを好んでいた食生活のせいだと思うのです。歯については、これ以外にも、歯痛についての変体詩なるものがあります。小宮豊隆に送ったもので、（大正 9 年 10 月 8 日）小型版の全集 15 巻書簡 1 の 105 ページにあります。興味のある方は後程ご覧ください。

②吾妻橋での入水未遂→「夏目漱石先生の追憶」

③首くくりの力学→「夏目漱石先生の追憶」

④バイオリンを買った話→「田丸先生の追憶」

⑤土産の鰹節→「夏目漱石先生の追憶」

寅彦は一本しかもってこなかったらしいですが、ネズミにかじられたものを持参した寒月君よりはずいぶんましだと思います。

「蛙の目玉の電動作用」や、「球すり」についても、寅彦がネタを提供したらしいと、中谷宇吉郎の「寒月の「首縊りの力学」その他」に書かれていました。

首くくりの力学についてさらに解説しますと、元ネタは、フィロソフィカルマガジンに掲載されたサミュエル・ホウトンの「力学的および生理学的に見た首くくりについて」という論文です。寒月君の演説の冒頭部分、「罪人を絞罪の刑に処するということは、おもにアングロサクソン民族間に行われた方法でありまして」はこの論文の完全な翻訳だそうです。意外なことですが、漱石には科学を理解する才能があった、と寅彦が書いています。かつて NHK のラジオでも特集が組まれていました。寒月君の演説を聞いてあくびをしていた苦沙弥先生とは大違いです。

元ネタ探しが一段落し、様々な作品を読むうちに、いつの間にか「寒月君」より、「寅彦」に重きが置かれるようになっていました。多彩なテーマもさることながら、自由というか、奇想天外な発想の数々。さらに「先見の明」があったことを知ったのです。とても 90 年以上も前に、書かれたものとは思えない作品がいくつもあります。

「物売りの声」

「今のうちにこれらの滅び行く物売りの声を音譜にとるなり蓄音機のレコードにとるなり何らかの方法で記録し保存しておいて百年後の民俗学者や好事家に聞かせてやるのは、天然物や史跡などの保存と同様にかなり有意義な仕事ではないかという気がする。」

まるで某国営放送局がやっているアーカイブスそのものです。当時は、一体どのくらいの人が、共感と理解を示してくれたのでしょう？　とても気になります。

もう一つは「流言蜚語」

「ある流言蜚語の現象が行われたとすれば、その責任の少なくとも半分は市民自身が負わなければならない。事によるとその九割以上も負わなければならないかもしれない。何とならば、ある特別な機会には、流言の源となり得るべき小さな火花が、故意にも偶然にも到る処に発生するということは、ほとんど必然な、不可抗力的な自然現象であると考えられるから。そしてそういう場合にもし市民自身が伝播の媒質とならなければ流言は決して有効に成立し得ないのだから」

これは、防災の日が来る度に取り上げられている気がします。にもかかわらず、今でも同じことは起きています。私たちは何を学んできたのか？　それとも、人はいつまでたってもその性質を捨てられないのか？　これ以上の追及は哲学的になりそうなので、やめておきます。

これだけすごいことを書いている人なのですが、信じられないことに、私の周囲に寅彦を知っている人はいなかったのです。

厳密にいえば、一人だけいました。私の母方の祖母です。仙台にいた祖母に、「多分、知らないと思うけど、この人の本、おもしろいんだよ」と言って、アンソロジーを送った際、「この人のことなら知っている」と言われたのです。ただ、当時は今ほど寅彦に執心していなかったので、どういういきさつで祖母が寅彦を知ったのかを聞くことはありませんでした。祖母は、私以上に読書家で、記憶力もよかったので、おそらく何かの本で読んで、寅彦の名を覚えていたのではないかと思われますが、もっとちゃんと話しておけばよかった、と今になって後悔しています。

そんなわけで、一人ぼっちであることに変わりはなく、ひたすら本を読むか、新聞雑誌に時々載る記事をスクラップする日々を送っていました。特段孤独だとも物足りないとも感じませんでしたが、平成 23 年のある日、とある漫画によって、大転換を迎えることとなります。それが、『先生と僕』（香日ゆら著、メディアファクトリー）です。書店で平積みされているのを見たのですが、ひっくり返してみたら、帯に寅彦の名前があるではありませんか。買わないわけがありません。

読んでみての感想は、「私以外に寅彦を知っている人がいる」そして、「私の知らなかったエピソードがたくさんある」でした。今思えば、バカバカしい話ですが、当時は自分では相当の寅彦通と思っていたのです。なのに、さらに詳しい人がいた。嬉しさプラスちょっとばかりの嫉妬心から、私の中の寅彦熱はますます高まり、もっともっと寅彦を知りたくなったのです。

しかし、手元にある資料だけでは限界がありました。当時は書店に置いてある本を購入していただけだったし、取り寄せようにもどんな本がいいのかわからなかったのです。そんな中、あることを思い出しました。「そういえば、あの新書に寅彦の記念館とか、お墓があるって書いてあったな。寅彦のゆかりの地である高知に行ってみようかな。そうだ、どうせなら漱石関係の愛媛にもいけば一石二鳥じゃないか？」

そして、平成23年9月。ついに四国の地を踏むこととなります。寒月君に出会ってから22年、寅彦を知ってから13年がたっていました。

高知では念願の記念館を訪問。お墓参りに行くこともできました。そして翌年にも来高を果たし、友の会に入会。

友の会に入会したことにより、さらなる寅彦探求の日々が始まることとなります。蔵書も増えました。こちらに来るたび古書店でついつい買ってしまうのです。

それにしても、まさか10年近くにわたり高知を訪れることになるとは思ってもみませんでした。やはり、寅彦について語り合える人たちがいるというのが、重要なのだと思います。一人でも本は読めますが、やはり仲間がいた方が、新たな情報や考え方などを得ることが多いからです。ただ、もう少し早くたどり着いていたら、と思うときがあります。そうすれば、さらにたくさんの人に会えたでしょうから。とはいえ、長い時間を経たからこそ、ここまで熱心になれたとも思えるので、なんともいえません。

それはともかく、いくら時間をかけたからとはいえ、どうしてこれほど寅彦に惹かれるのでしょうか。「寒月君のモデルだから」「多彩な人だから」「先見の明があるから」「猫好きだから」それだけではないような気がして、思いついたのが「お互いに郷土愛をもっているからではないか」でした。

東京生活の方が長かった寅彦ですが、高知には特別な思いがあったはずです。郷土に関する随筆には郷愁の念が見受けられますし、晩年になりその数が増えたことも、それを証明していると思います。

私も自分の住む土地が好きです。夏は蒸し暑いし、冬の空は常に鉛色で、大雪で不便なところもありますが、雪の降らない土地に住むと考えただけで、寂しくなってしまうのです。

私の好きな随筆ベスト3は、1位が「重兵衛さんの一家」、2位「竜舌蘭」、3位「あらし」です。すべて郷土随筆です。

これは、郷土愛を持つ人間の同志愛というものなのでしょうか？　もっとも、そんな概念が存在するものなのでしょうか？　もっと詳しく調べてみたい気もしますが、哲学的かつ、民俗学的な見地になってきそうなので、この疑問については今後の課題にしていきたいと思います。

最後に、これからの寅彦とのかかわりについて、述べておきたいことがあります。

寅彦を知る人は、近年、様々な出版社から文庫やアンソロジーが発売されたことにより、以前よりは増えているかもしれません。メディアに取り上げられる機会も多い気がします。しかし、それは震災関連に紐づけられていることがほとんどです。寅彦の警句や意見を、防災や、安全な社会づくりに生かすのは大切なことですが、もっと平和な状況でも、取り上げてもらえないだろうか？　欲を言うなら、ある一定の時期だけでなく日常的に取り上げてもらえないものだろうか？　と思ってしまうのです。

今回の発表でお話しした「寒月君つながり」や、「郷土愛つながり」をもっといろんな方に知ってもらえれば、その願いはかなうのではないでしょうか？　そして、これからも、寅彦を読み進め、新たな魅力を見つけることで、もっと多くの人を巻き込めたらいいな、とも思っています。以上で、今回の発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

（令和5年10月22日）